

博物館都市巡り⑥

ジュネーヴ

——〈源流〉の街——

高橋 哲雄

発信型都市ジュネーヴ

歴史上の人物についてのこととお断りしているが、私には個人的にはどうにも付き合いたくない人に惹かれる性癖がある。宗教改革家カルヴァンがそうであり、思想家ルソーが大いにそうであり、すこし趣はちがうが詩人のシェリーもその部類に入る。すべて自己肥大的で、主張もくせも並外れてつよい発信型人間である。そうした人たを生み、育て、引き寄せ、いつてみれば孵卵器やら触媒やらの役を務めたのが、これから紹介するジュネーヴという街であった。

博物館には資料を集め、鑑定し、保存し、それを系統立てて整理し研究する機能のほかに、それを公にする発信機能がなければならぬ。資料の展示、紀要による研究成果の刊行や、ときには他館と協力しての企画展の開催などもおこなう。それがなければ、個人コレク

ションとかわるところがない。

私は、都市にも発信型都市とそうでない都市、ことによっては「受信専用型都市」といつてよい都市があるように思う。たとえば音楽文化についていえば、ロンドンには十七世紀のパーセルや今世紀のエルガー、ブリテンあたりを除くと、大作曲家を生んでいない国のかなしき、どうみてもウィーンのような発信型都市とはいえないけれど、反面音楽の「受信」にかけてはこれほど耳の肥えた聴衆の層の厚い都市もめずらしい。歴史のあるいいオーケストラもいくつもある。ヘンデルはここで大をなし、メンデルスゾーンの音楽的開花の培養土にもなった。もしモーツァルトがここに留まりつづけていれば、彼の生涯と音楽はどうなっていたかと思いをめぐらすのは、音楽史上最大の「もし」のひとつではないだろうか。歴史家ヘルマン・レヴィはドイ

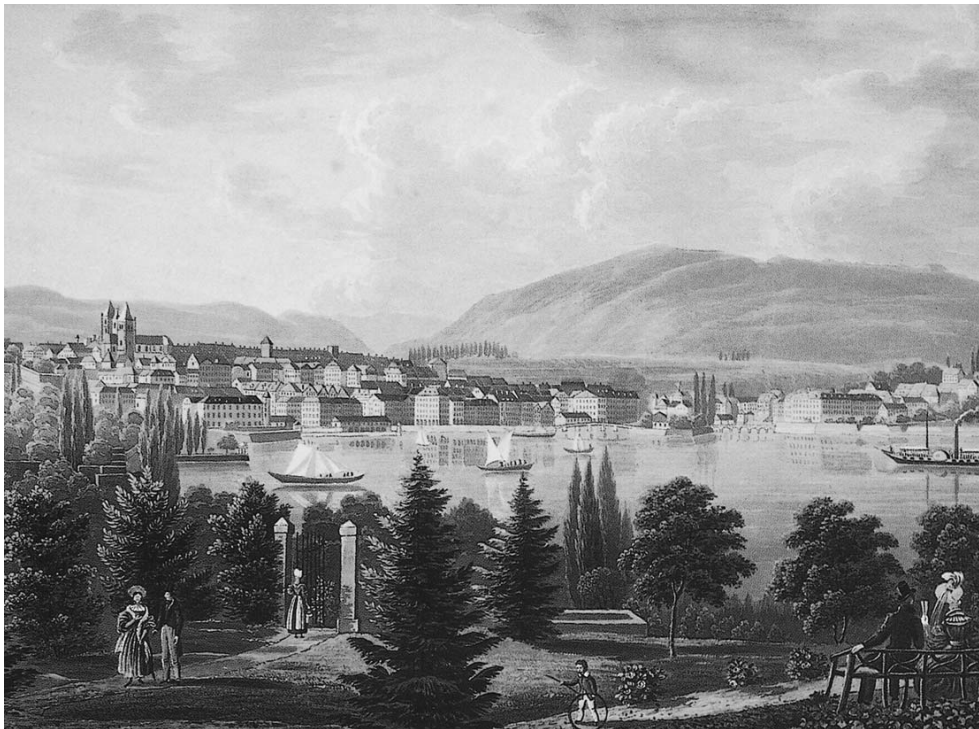
ツ音楽のイギリスでの受容ぶりを「片想いの音楽国」と巧みに評した（『イギリスとドイツ』拙訳、未来社、一九七三）。

ジュネーヴはロンドンと対照的に発信型の思想都市であった。十六世紀から十九世紀にかけて人類の歴史を動かすような大思想の発信源となり、二十世紀に入っても国際連盟、国連、ILO、国際赤十字と、人類のありうべき方向を示すような機関が集中している。ジュネーヴの名をはじめて広く知らせることになったカルヴァンの神政都市時代（一六四三～一六四）に人口数千、ルソーの生まれ育った十八世紀にも人口二万四千人の、渺たる小都市がどうして世界を変えるほどの思想運動の震源地たりえたか。この問題、思想の誕生の条件を考える上でも、都市の個性の成り立ちを知るうえでも、なかなか興味深くはないだろうか。

ジュネーヴの位置

ジュネーヴはスイスの一部と思われているが、歴史的にはそうでない時期が長かった。一八一五年までは、ナポレオンの支配下の短い時期を除いて、スイス連邦に帰属していない独立の都市国家だった。

地図をみれば一目でわかることだが、ここはスイスの南西端、フランス（歴史的には主にサヴォア王国）に三方を囲まれた一角、逆にいえばフランスに向かつて鋭角的に突出した一角を占めてきた。一五三二年以来ジュネーヴはカルヴィニズムの国であり、フランス、サヴォアはカトリック国であったから、このかたちは敵地に囲まれた出城、フ



コロニーの丘（ディオダッティ荘のある）からのジュネーヴ、1830年頃（D. A. シュミット画）

ランス側からいえば、わが身にふかく刺さったトゲのような存在ということになる。

単純に距離だけをとっても、ジュネーヴはスイスの主要都市よりフランスやイタリアのそれの方が近い。ベルンに一六四^キ、バーゼルに二六四^キ、そしてチューリッヒには二八九^キの距離であるのに、フランス側ではシャンベリに九六^キ、リヨンに一五一^キ、イタリア側ではアオスタに一四一^キ、トリノに二〇九^キである。言語的にもフランス語圏であり、人や財貨の流れもドイツ語圏スイスよりフランスとの間の方が密である。政治・軍事的にはトゲでも、経済・文化的にはもたれあっていた。

こうしたフランスとの密接な関係は、単なる距離以上にジュネーヴがローヌ河の源を扼しているという事実依存している。レマン湖という天然の巨大ダムはまさにこの街を通り抜けるところでローヌの谷に流れ落ちる。その平均流量はフランス最大で、ロワール河の一・八倍、セーヌ河の四倍に達するが、落ち口にかかる橋に立てば十分それは実感できるだろう。それは交通の大動脈であり、フランス最大の水力発電源である。

最後に、ジュネーヴはアルプスの自然の一部をなしている。それは、琵琶湖を一割ばかり小さくしたサイズで深さは三倍あるレマン湖の湖尻に当たり、ぶどう畑の広がるのびやかな丘陵の田園地帯を近景にして、湖の対岸にはジュラ、背にはアルプスと、雪の山を遠景にいただく。十八世紀末にバークが概念化した美学用語を使うと、「優美」

(beautiful) な近景と「崇高」(sublime) な遠景を同時に楽しむことができる。それに前後して外国、とりわけイギリスから上流人士を中心に観光客の群が押し寄せ、住みつく人もあらわれた。ロマン派の詩人たちはその先触れとなる。

「プロテスタントのローマ」

このようにユニークな地理的位置にあるジュネーヴにさらに鮮烈な性格を刻み付けたのがジャン・カルヴァン(一五〇九―一五六四)である。

彼はジュネーヴに有名な神政政治を打ち立てた。カルヴィニズムはジュネーヴ共和国の国教となり、彼が頂点に立つ牧師会の規制は市民生活の隅々にまで浸透し、彼が支配権を得た一五四三年以後街の空気は一変した。それまでのジュネーヴは「やさしく親切で思いやりがあり、自由で、慎重というよりは度量が大きかった。大部分の人は呑気だった」(モンター)という小さな市場町だった。それがカルヴァンの統治した十八年の間にヨーロッパでもっとも秩序や風紀にやましく、教育としつけが「一種の芸術にまで高められた」模範都市になり、多くの国からプロテスタントの信者が巡礼に訪れる「プロテスタントのローマ」になった。

その裏には、あの自由主義的伝記作家シュテファン・ツヴァイクが『権力とたたかう良心』(一九三七)でナチスの支配になぞらえたカルヴァンの圧制があった。住民はささいなことでもきびしく罰せら

れ、最初の五年で十三名が絞首刑、十名が斬首、三十五名が焚刑に処せられ、七十六名が追放された。刑務所は「犯罪者」であふれ、収容できなくなった。巧妙な相互監視・密告制が敷かれ、カルヴァン自身があたらしい拷問法を提案したりもした。

当時のヨーロッパを震撼させたのは、ただの跳ね上がりすぎない若いスペイン人医師のセルヴェを、三位一体説を否認したという理由で教皇方に密告し、それが黙殺されると、ジュネーヴに舞い込んできた彼を焚刑にした事件だった。また、かつては同志であったが、寛容の問題をめぐって彼と別れバーゼルに去った神学者カステリオンを、あらゆる手段を使って追い詰め、ついには窮死させた。その執拗さ、



ジャン・カルヴァン

陰険さには一種異様なものがある。どんな小さく無力な敵でも手加減をすることはカルヴァンにはありえなかった。「水に落ちた犬は打て」というのは彼のためにつくられたような言葉である。

こうした名声と悪名の形影相伴う道行きぶりは、ジュネーヴが国際的な宣教師の供給源となったことでいっそうつよめられた。この街はりっぱな学校を建て、ヨーロッパの各地から人材を集めてきて鍛え上げ、送り出した。その成果がスコットランドやオランダで生かされる。彼らは戦闘的で往々諜報任務を帯びていたことから、フランスでもサヴォアでも常に紛争刺激要因になった。ジュネーヴはカトリック圏への、くりかえし出撃を試みるプロテスタントの出城だったのである。

こういう役割はルター派のばあいにはみられなかった。アルサスを中心とするフランス北部はルター派のつよい地域だったが、彼らがカトリック住民とあつれきを起こすことはめつたになかった。ルター派は人口の大きな部分を占めているのに、カトリック・フランスの脅威ではなかった。それに対して、ニースやモンターバン、ラ・ロッシュエールなどカルヴァン派のつよい地域ではジュネーヴは常に無視できない影響力を持ちつづけたのである。

亡命者の役割

それにしてジュネーヴはなぜカルヴィニズムの恰好の培養基になり発信基地になったのだろうか。どんな条件がこんな小都市にそれを可

能にしたのだろうか。

まず、ジュネーヴは交通の要衝であるところから古くから市の立つ商人の町だった。神聖ローマ帝国下でも自由都市であった。司教領であった十四世紀末に司教公が町のブルジョワジーに特許状を与えて以来の市民自治と国際的主権の伝統がここにはあつて、今日のジュネーヴの紋章（左に神聖ローマ帝国の鷲、右に司教の黄金の鍵）にも示されている。それは誇り高い、しかし人を受け入れる気風のゆたかな街であつた。

しかし、バーゼルやチューリヒに比べると町が小さく、軍事力も弱体だったので、独立を守るためには、技能、資金、知性などの「財産」をもった、主にフランスからの移民、とりわけ宗教的亡命者の力を借りねばならなかつた。

そもそもカルヴァンその人がフランスからの亡命者なのである。はじめ一五三六年にファレルの要請でジュネーヴに住みついたときは、二年たらずで市民たちにその独裁的志向を嫌われて追放されたのに、三年のちに今度は辞を低くして招かれたのは、この町に指導者の人材が払底していたことの証であつた。以来この町を牛耳つたのは圧倒的に亡命者とその子孫である。旧市街の南のはずれ、一段下がつた公園に巨大な宗教改革記念碑がつくられていて、四人の改革者——カルヴァン、ファレル、ド・ヴェーズ、ノックス——の彫像が勢ぞろいしているが、一人としてジュネーヴ人はいない。亡命者がいなければ、この町の最大産業である印刷業も、時計製造業も、金融業も成り立た

なかつただろう。

その当然の結果としてフランス語が広く使われるようになり、ヨーロッパで一番普及していたこの言葉の採用はジュネーヴの発信力を高めることになった。

ジュネーヴはまた直接民主主義に近い全住民総会による決定方式と、しかし、それは実のところ形骸化していて少数市民の寡頭的支配の地でもあることで知られていたのだが、こういう「寡頭民主制」ともいべき政治のかたちはカルヴァンには至極好都合なものだつた。

こうしてカルヴァンによってジュネーヴは近代ヨーロッパ文化を構成する重要な要素の源流の町となつた。民衆の読み書き能力を高め、資本主義の労働倫理の発現を助けた。皮肉な言い方になるが、対抗宗教改革を刺激したことも含めて、キリスト教の活性化に貢献した。

しかし、この神政政治の町はカルヴァンの死後一世紀半のうちにまったくの鬼子を生み落とした。ジャン・ジャック・ルソーという、これまた一時代を切り拓いた男である。カルヴァンは死の床でジュネーヴについて「強情で不幸な国民」と、いまいまして語つたそうだから、あるいはルソーのような人物が現れる事態を見通していたのかもしれない。

ジュネーヴの鬼子——ルソー

ルソーのジュネーヴとのつながりはアンピヴァレント（相互背反的）なものである。

ルソー（一七二一—一七八八）はジュネーヴで生まれ、そこで生涯の最初の十六年をすごし、この地を出奔して、生きるための方便としてカトリックに改宗し、長い年月をフランスで送ってから、ジュネーヴの出であること、さらにはその最高の身分である「市民」の家柄であることを誇りとした（最高といっても人口の四人に一人がそうで、実権は一握りの小会議メンバーに限られていた）。最初の著作『学問芸術論』（一七五二）の扉には「ジュネーヴ市民」という肩書きを記し、次の『人間不平等起原論』（一七五五）にいたっては「ジュネーヴ共和国に献呈」さえしている。著書を国家に捧げるといった行為は異例のことだが、彼はそれをあえてした。一七五四年にはプロテスタントに戻り、ジュネーヴの市民権を回復している。

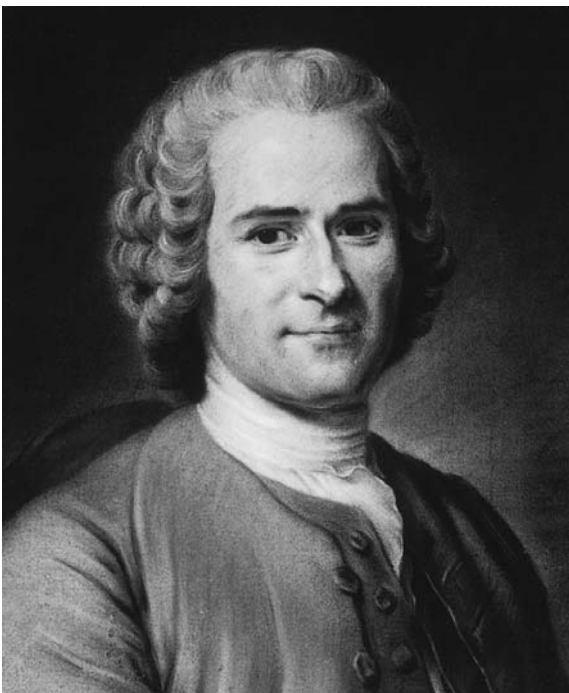
その頃のルソーのジュネーヴへの思いは次のようなものであった（デュパン夫人への手紙、1754・7・20）。

この町は世界でもっとも魅力的な町のひとつであり、住民は私の知るかぎりもっとも賢明で、もっとも幸せに思えます。自由がそこでは確立しており、政府は穏やかで、市民たちは啓蒙され、堅固ですが控えめで、自分たちの権利を知ってそれを勇気をもって支えています。他の人びとの権利も尊重しています。

こうした賛辞は現実のジュネーヴにみられる都市貴族の寡頭支配体制とも、長老会による家庭内のトランプ遊びの禁止に及ぶ風俗取締り

の実態とも、およそそぐわぬものであった。事実ルソーはこの手紙の八年後に『エミール』と『社会契約論』（ともに一七六二）を焚書にされ、逮捕状が出されるといふかたちで、ジュネーヴ市当局の迫害を受けることになる。フランス当局は『社会契約論』は禁書とせず、逮捕といっても、大貴族たちはなお彼を庇護の下に置き、警察も見てみぬふりだったが、狭量なジュネーヴではそうはいかなかった。

ルソーの反撃は彼らしくなく鈍かった。市議会内のルソー派の動きによって迫害が解除されるのを一年近くもむなしく待ったのち、やっと市民権の放棄を宣言するが、内容は『社会契約論』中のカルヴァン



ジャン・ジャック・ルソー、1753年
（モリス＝カンタン・ド・ラトゥール画）

礼賛を一転して痛罵に変えただけのものである。カルヴァンは悪だが、共和国の伝統は愛しているというのだ。ジュネーヴ批判は、これまでの言動の自己否定に陥りかねないからでもあろう。晩年の自伝的作品『告白』（一七七〇完成、八〇、八九刊行）でもなお、自分が、ともに市民の家柄である父母の間に生まれたことにこだわりをみせている。

「生みの親」ジュネーヴ

それにしてモルソーの故国への、この思い入れのつよさはなにゆえなのだろうか。

幼少時の、とくに父からの独特の「刷り込み」があつたことはまちがいない。父は祖父の代からの時計職人で、これは市民、町民（ブルジョワ）にしか許されぬ特権的職業だつたが、彼は勤勉な職人ではなく、放浪癖があり、落ちぶれて山手から下町へ引越すのだが、それは彼をかたくなに市民の誇りに執着させた。貴紳にしか許されぬ狩や帯剣にこだわり、やがてそれが決闘沙汰に及び、十歳のルソーと兄を置いて逐電する。

この父はまた小説好きで、ルソーにブルタルコス英雄伝を読んできた。それをつうじてジュネーヴが、王侯貴族のみが主権者であるフランスとちがって、市民が主権者である共和国であり、それは古代ギリシャや共和制のローマと同じ理想の共同体なのだと吹き込まれたのである。

他方、彼にとつていわば「育ての親」となったフランスにルソーは深いところではなじめなかつた。後年オペラの作曲や著作で身を立てるまでのルソーは、才能を愛されはしても、しょせん身分も教育もない一介の従僕かせいぜい秘書にすぎず、自尊心を傷つけられることが少なくかつた。それに、都会風で宮廷、社交界中心の洗練されたフランスの学芸・文化は、自然派の彼の肌合いに合わなかつた。百科全書派の人びととの親交も、ジュネーヴとの決別宣言以前にすでに冷え切っていた。

そうした鬱屈は望郷の念と結びついた。子供は「育ての親」がいくらよくしても「生みの親」にあこがれるものだ。ましてルソーは出生とともに母を失い、十歳で父に捨てられるという精神的飢餓感があつた。そのうえ自分の軽はずみから（城外で遊びほうけていて城門の門限に間に合わなかつたというそれだけで）故郷を捨て、カトリックに入信するという背教行動までとつた。そうした悔恨の情もあつた。飛び出して二年後にある偶然からジュネーヴを訪れ、ローヌ河の橋上、おそらくいま「ルソーの鳥」と呼ばれている辺りに立ち、「感動のあまり、失神のようなものを感じ」、「自由の気高い映像が私を高めるとともに、平等、団結、風俗の穏やかさの映像に、私は涙が出るほど打たれ、それらすべての宝を失ってしまったという、激しい悔恨の念が起るのだった」。

ルソーが故郷に留まっていたら？

ではルソーが出奔せず、ジュネーヴに留まりつづけていたら、少年ジャン・ジャックは思想家ルソーになることができただろうか。大思想家になり、フランス革命の父としてパンテオンに祀られることになっただろうか。

これまた歴史の大きな「もし」であろうが、私はジュネーヴではルソーは早晩窒息したにちがいないと考える。たしかに彼はフランス文化に反発した。その洗練された学芸が魂の腐敗、徳の消滅を招いたとただ主張するだけではなく、「自己改革」を実践した。身を飾る一切のもの——時計もぜいたくなシャツも、白の長靴下も——捨て、貴族に吸着する割のいい秘書の仕事をやめて、写譜で暮らすつと、周囲には発狂したと思われる。つまり、ジュネーヴの規律をパリに持ち込もうとした。時計職人の生き方に先祖返りしようとしたのである。

同時に、しかし、かれはそれと矛盾した行動をとる。ヴェネツィアでの劇場通いにはじまり、ついにはオペラ「村の占い師」を作曲、上演するのである（一七五二—三）。オペラは魂を墮落させる快楽として彼自身が排撃した娯楽であった。さらに小説、それも恋愛小説にも手をつける。『新エロイズ』（一七六一）がそれである。芸術が人心を惑わすと揚言してきた指導的思想家が甘美で感覚的、恋愛至上的なメッセージを含む大ラブ・ロマンスを世に送ったのはスキャンダラスであった。ルソー自身にも抵抗があったといわれる。

こうした「芸術家ジャン・ジャック」と「道徳的な公民ルソー」と

の葛藤は「ルソー問題」の一面をなす。この骨の髄からのロマンティックな精神をジュネーヴのなかに封じ込めることは、しよせん無理というものだった。早くフランスに飛び出したのは芸術家ルソーの誕生にとつて幸運であった。ジュネーヴがルソーにとって長く心の故郷でありえたのは、早くに故郷を捨てたからこそだ。ジュネーヴの山手の本通にある彼の生家も、ローヌ河の中洲のポブラの島も、そうした屈折した不在のもつ意味を象徴すると、私にはみえる。そして、この街の指折りの広場であるヌーヴォ広場の一角に、カルヴァンの時代にはもちろん、ルソーの時代にも考えにくいりっぱな劇場が立っているのさえ特別な意味を帯びてみえはすまいか。

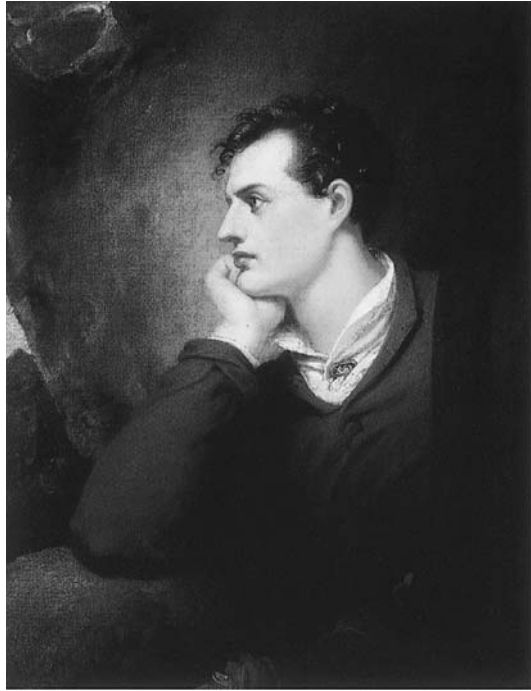
詩人たちの夏

ルソーの没後二十年の一七九八年、ジュネーヴはナポレオン軍の侵入によってフランス領になるが、一八一五年に彼の帝国が崩壊するとともに独立を回復し、二十二番目の州としてスイス連邦に加入する。そして早くも翌年の夏にはイギリスの観光客がレマン湖畔に押し寄せはじめ、それに混じってロマン派詩人の第二世代（第一世代はワーズワス、コールリッジら）を代表するバイロンとシェリー、そしてシェリーの愛人メアリ・ゴドウィンの姿があった。

バイロン（一七八八—一八二六）は当時二十八歳。すでに文名を確立し男爵位を継いで、その不羈奔放な性格と美貌から社交界の寵児

だったが、妻との離婚とその原因となつた異母姉オーガスタとの近親姦の疑いで、社交界から弾き出されるかたちでジュネーヴに落ちてきた。ドーヴァーの港では小間使いに身をやつした貴婦人たちが「美貌の悪魔」の見納めをと、ひしめきあつたという。

四歳下の、これまた白面の貴公子である詩人のシェリーはバイロンを追つて、この地にやってきた。というのは、彼の愛人メアリ・ゴドウィン（当時十八歳、のちに妻となる）の異母妹クレア・クレアモントがバイロンとの一夜の交情から身ごもり、千二百^キの壮大な「追っかけ」をしようとシェリーに同行を頼むといういきさつがあつたのだ。メアリの父は高名な急進主義哲学者で作家のウィリアム・ゴドウィ



ジョージ・ゴードン・バイロン、1813年頃
（リチャード・ウェストール画）

ン、母は女権運動の元祖メアリ・ウルストンクラフトで、母はメアリを産んで亡くなつた。父の再婚相手の連れ子がクレアなのである。クレアが紹介するかたちで、二人の詩人はここで出会い、六年後のシェリーの死まで親交を結ぶ。

彼らがこの年の夏をともしすしたのは街を東にだらかな丘をいくつか越えたかどうか畑の斜面の郊外別荘で、バイロンと侍医のポドリが湖を見下ろすディオダッティ荘を、シェリー一行がその下の湖畔のシャピユイ荘を借りた。ディオダッティ荘はいまもそのままの姿で残っている。

ところで、バイロンはなぜジュネーヴをめざしたのだろうか？

とにかくイギリスから脱出したかったことはたしかだ。スキヤンダ



若いメアリ・シェリーの肖像とされる珍しいもの
（作者不詳、ローマ・キーツ・ハウス蔵）



ディオダッディ荘。右手がレマン湖へ下る

ルになった当初は郷里のスコットランドや湖水地方を考えたらしいが、国内では追い回されるのにかわりない。となると、戦争の影響の残る土地は避けて、夏だからスイスへということになる。そのうえ、ジュネーヴとその周辺には、かれの愛読したルソーの『新エロイズ』の舞台歩きという格別の魅力も待っていた。

シェリーもバイロンの影響を受けて『新エロイズ』熱にとりつかれた。それまで彼がこの恋愛小説を読んでいたかは明らかでない。しかし、それを携えてのバイロンと二人しての十日間のレマン湖舟遊によつて彼は深く心をゆすぶられ、ルソー観は完全に変わった。それまで彼はルソーをヴォルテールやヒュームなどと同じ啓蒙の子、「哲学者」仲間にはすぎないと位置づけていたが、忽然としてルソーの詩人的本質を発見するのである。

そこから何が生まれたか？

バイロンの『チャイルド・ハロルド』の第三編と『シヨンの囚人』はこの旅の直接の所産である。シェリーの詩業にもそれに劣らぬ影響があった。未完の大作『生の勝利』がそれだ。しかし、彼らのジュネーヴ体験の、文学史上最大の話題を呼ぶ成果は思いがけぬところに生まれた。それまでものを書いたことのないメアリ・ゴドウィンの『フランケンシュタイン』、または現代のプロメテウス（一八一八）がそれである。

『フランケンシュタイン』の誕生

ゴシック・ロマン史上もつとも有名で現代の神話ともなったこの作品は、デイオダッティ荘での夜の集まりから生まれた。雨に降り込められた六月中旬、バイロンがゴースト・ストーリーの競作を提案したのにはじまる。そのときのメアリの着想が二年後作品となった。

『フランケンシュタイン』——これほど名が知られていて、中味の知られていない物語も珍しいだろう。第一、「フランケンシュタイン」といえば、まずたいていの人が主人公の若い科学者ではなく、彼が創り出した怪物、ないし合成人間のことで取り違えている(H・W・Fowler, *Modern English Usage*, 1926)。⁹ 創造者と被害者、加害者と被害者、あるいは追つ者と追われる者が、めまぐるしく入れ替わるのを象徴するかのようである。あらずじを紹介しておく。

物語は、ジュネーヴ出身の若い科学者ヴィクター・フランケンシュタインが南独のインゴルシュタット大学に留学中、死体の部分を寄せ集めて生命のある人間を創り出そうという夢に取りつかれるところからはじまる。実験は成功したが、被造物の予想外の醜さにシヨックを受けたヴィクターは、それを放置したまま実験室から逃げ出す。

放置された怪物は、その面立ちに似ず知能が高く、淋しがりだった。人間と付き合いたいのだが、外貌の醜さからいつも拒絶され、失望と孤独のうちに復讐心がぎざぎざ。創造主であるヴィクターを頼るうとして、たまたま出遭ったヴィクターの弟に罵られ、衝動的に殺して

しまふ。しかも、怒りのあまりその罪を小間使いにかぶせて遁走。彼女は処刑される。

うちのめされたヴィクターのもとに怪物が現れ、要求を突きつける。不幸を生んだのは孤独なのだから、自分と同じぐらい醜い伴侶を造ってほしい、そうしてくれれば人間と離れたところで暮らし、二度と姿をみせない。

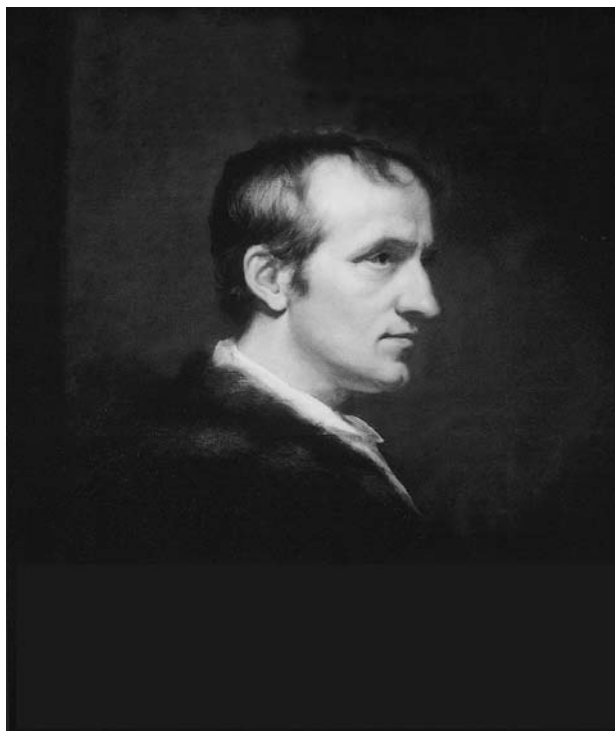
ヴィクターは同意し、スコットランドの北のはずれで作業にかかると。しかし、最後の段階で窓から覗き込む怪物の顔を見て、人類全体の脅威になる醜悪凶暴な子孫がぞくぞく増えるのでは、と思いつき、出来かけた花嫁を解体してしまふ。

怪物は復讐を宣言し、まずヴィクターの親友を、次いで婚約者を婚礼の夜に殺す。ヴィクターの父はシヨックで死ぬ。愛する者のすべてを失ったヴィクターは、追われる身から追う身に転じる。

怪物も対決に応じ、両者は極北の氷原で向かい合い、二人をのせた氷塊が割れて水に吞まれる。ヴィクターは、この物語全体の語り部である若い冒険家の船に救い上げられ、一切を語り終えて息絶える。その死を見届けた怪物は悲嘆と悔悟の声を挙げ、氷原にわが身を焼き尽くす薪を積み上げて、そこに身を投じると告げて闇の中に消える。

フランケンシュタインとは誰か？

「怖いというよりかわいそうな話じゃないの」と、この話を始めて読んだとき中学生だった次女は叫んだものである。さよう、教会離れ



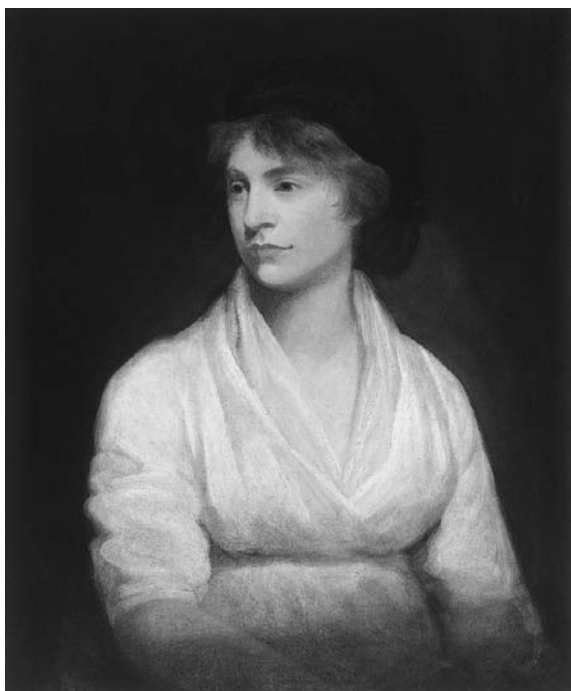
ウィリアム・ゴドウィン

し、SFずれた現代人にとっては、もうこれはホラーではなく、残酷な寓話といってよい。いや、創作の当てもメアリにとっては家族関係の現実、とくに出産をめぐる痛切な体験から生まれた想念を具象化した話なのであった。彼女にとって「怪物」は二人のフランケンシュタインから生まれた彼女自身なのであった。

第一のフランケンシュタインは父ゴドウィンである。妻のメアリ・ウルストンクラフトがメアリを産んだ後亡くなり、再婚するが、後妻は我も押しもつよく俗物的な女性で、夫が高名な亡妻の肖像画を書斎

にかけているのも、その血を引いて一途で生きいきした精神の、異常な知識欲にみちたメアリも気に入らなかった。メアリは応接室のソファの陰にかくれて、父の友人である詩人コールリッジが自作の「老水夫のうた」を朗唱するのを眼を輝かせて聴き入るような少女だった。彼女は継母と顔を合わせるのがいやで、毎日のように亡母の墓に出かけ、そこで本を読んだり考えごとをしたりしていた。

そこへ現れたのがシェリーだった。サセックスの準男爵家の跡継ぎに生まれた詩人は火のように烈しい気性の持ち主で、無神論擁護の文書を配布したかどで、オクスフォードを放逐され、父からも勘当され

メアリ・ゴドウィン・ウルストンクラフト、1797年頃
(ジョン・オビー画)

た。十八歳で二つ年下のパブ経営者の娘ハリエットと駆け落ち結婚し、アイルランドで貧民解放のピラをまき、ウエルズでユートピアづくりに血道を上げたりする。ゴドウィンの主著『政治的正義』を早くから読んで、フリー・ラブ、共和主義、反国家の主張に共鳴していたが、彼の健在を知って訪ねてきたのである。

シエリーはゴドウィン家から二重の意味で歓迎された。ひとつは思想上の同志として、またひとつには金銭上の救世主として。ゴドウィンの家計は火の車でいつも莫大な借金を抱えていた。「古今をつうじてもつとも恥知らずな金借り」という評言はある意味では当たっている。彼は主義のためなら金持ちから金を引き出すのは当然と考えていた。シエリーの金はたちまち底なし沼に吸い込まれるように、ゴドウィンへと流れはじめた。シエリー自身、実家から引き出せる金はわずかで、いつも債権者に追われる身だったのに、ゴドウィンと出会ってから、父の死による財産相続権を担保とした高利の借金にまで手を染めはじめた。

そうしたなか、シエリーとメアリは恋に落ちる。シエリーと妻ハリエットの間には、メアリが入り込む少し前から亀裂が生まれていた。ハリエットは当初こそけなげにシエリーの考えを身につけようとしたが、背伸びはいつまでもつづかず、家庭の安定や体面、若い女性らしい装いや買い物などの楽しみを求めようになっていた。シエリーはそれに妻の「ブルジョワ的限界」を感じて、いらいらする。そこに、失われた知的連帯感を完全に埋めてくれる娘——ゴドウィンとウルス

トンクラフトの娘——が出現したのである。

彼は、あの偉大なメアリ・ウルストンクラフトの肖像のままで、メアリから自分の苦しみを打ち明けられ、母の墓参りが唯一の安らぎだと聞かされて、同行を申し出る。二人が恋を語り合ったのはその墓前でのことだ。私がローマのキーツ・ハウスでみた小さな版画では、木立の間の墓に二人が並んで腰掛け、木立の外側で二人のシンパだったクレアが張り番をしているという図柄になっている。メアリ・ウルストンクラフト没後十七年のことであつた。

ゴドウィンは二人の間柄を知ってただちに引き離そうとし、二人はそれに驚き、傷つく。ゴドウィンは結婚制度の無意味を論じ、自由恋愛を主張してきた思想家ではないか。それが既婚の男と娘の關係に激怒し、社会的体面を気にする俗物であるとは。しかも、彼はシエリーの出入りを禁じておきながら、金の借り入れは要求しつづける男でもあつたのだ。

こうして「フランケンシュタインはゴドウィンである」という読みが成立する。メアリからすれば、自分やシエリーを自由思想に作っていないながら、それとは程遠い家庭を再婚によってつくり、自分を孤独の中に放置し（人間たちの怪物への冷たい態度は継母の自分への態度に当たる）、自分にふさわしい配偶者をと懇願しても、聞き入れてもらえない。このおそるべき身勝手な「理性」の象徴こそゴドウィンにほかならない、ということになる。

親子のこの葛藤は、ジュネーヴへの四カ月の旅の三カ月のちに、不

幸な事件によって部分的に解決をみた。ハリエツトが自殺したのである。その知らせが届いた二十日後、シェリーとメアリは結婚式を挙げた。ゴドウィンはそれに参列したのち、友人たちに娘婿の家柄と富を誇る手紙を書き送っている。こうした父の姿がメアリにはおぞましく映らなかつただろうか？

もうひとりのフランケンシュタイン

フランケンシュタインはゴドウィンではなく、シェリーだという読みもある。

シェリーはゴドウィンの弟子であり、思想的跡継ぎである。メアリにとつては恋人であり夫であるとともに、教師であり、メア리를「造る」うえで大きな役割をはたした。そして二人が結ばれてからは、ゴドウィンとはまた違った、より深刻な意味でメア리를苦しめる。

シェリーは反逆児だった。若いときから「気狂いシェリー」といわれた。

裕福な大地主だった父への反抗にはじまり、国家、教会、学校、結婚制度と、あらゆる権威に牙をむいた。そのまったく周囲を省みることのない純粹さ、直情径行ぶり、それにほっそりした非地上的な風貌から、彼は「空気の精」とか「天使」のようといわれた。二重人格的だったゴドウィンとちがって、裏のない「透明な」人とされた。

貧しい人、虐げられている人を見ることができなかった。行く先々で苦しんでいる人がいると、助けようといきりたった。アイルラ

ンド人民を救おうとダブリンに出かけ、危険を冒して街頭でピラをまき、アイルランドの庶民の心の支えであるカトリック教会を信じてはならないと叫んだ。マールウでは、寒い季節になると、貧しい家に毛布を配り、路上で着ているものを脱いで人に与えた。ゴドウィンばかりでなく、彼の友人で彼にたからなかつた者は一人もいないだろうといわれるほど、高利の金を借りてそれをばらまいた。

そうしたシェリーのイメージから、彼の死後、一八四八年の革命騒ぎの頃まで、彼は「人民の詩人」とされ、労働者階級の間で特に高い人気を得た。



パーシー・ビュッシャー・シェリー、1819年
(アメリア・カラン画)

反面、他人の立場とか、自分と違う考えがありつるといふことがわからぬ人だった。不思議なほど、そういう点では想像力が欠如していた。

メアリをもっとも苦しめたのは彼の男女関係における奇妙な「博愛主義」だった。彼は恋人や妻との旅に若い第三者を同行させるといふ、理解しにくい行動様式を好んでとつた。ハリエットとの最初の駆け落ちのときは友人ホツグを誘って合流させ、途中金策のため二人を置いて抜け出しさえした。メアリとの二度の大陸への駆け落ちのときも、クレアを同行した。クレアとはしばしば同居し、クレアだけとの旅もしている。シエリーとクレアとの関係はシエリーの研究者の古くからのテーマで、わからぬ部分がまだ多い。しかし、メアリがそれに不快を覚え、苦しみ、クレアを嫌うようになったことはたしかだ。いったい、シエリーはよくもわるくも嘘のない人間、あるいは主義として嘘をつかぬことにしている人間であつて、そのためいぶん人に残酷な仕打ちをしている。メアリと恋に落ちたときも、それを驚くべき率直さでハリエットに告げ、メアリの魅力を理解すべきだと説いている。メアリとの駆け落ち先の大陸から彼女に手紙を送つて、ぜひ合流せよと呼びかけたりもした。

結婚後のメアリはハリエットの憂き目を再三味わされることになる。シエリーは数人の女性とあけつびるげに恋をし、詩をささげた。シエリーが半ば自殺のように嵐の海に乗り出して溺死し、打ち上げられた遺体が浜辺に積まれた薪で焼かれたとき、メアリはおそらくある

解放感を味わうとともに、『フランケンシュタイン』の結末を思い出して、戦慄をおぼえたのではないだろうか。焼かれるのが「怪物」であつて、「フランケンシュタイン」でないという違いはあるとしても。

フランケンシュタインのなかのルソー

しかし、『フランケンシュタイン』の創作はメアリの個人的体験だけに根をおいたものではない。彼女は無類の読書好きで、同じく本の虫であつた夫シエリーとともに思想書も文学書もむさぼるように読み漁つた。作家としての自信のなさもあつて『フランケンシュタイン』は怪物さながらにあちこちの作家、思想家の作品の場面やアイデアの継ぎ合わせという一面をもつていた。そのなかでも見落とすことのできぬのはルソーの影響である。

『フランケンシュタイン』のなかにルソーの痕跡を見つけるのはむつかしくない。

ヴィクターの出をジュネーヴに設定したのがまずそうだが、見やすいところでは、彼の弟殺しの罪を怪物が小間使いにかぶせる件りで、『告白』中の有名な、少年ルソーが盗みの罪をやはり小間使いになすりつけた場面を思い出す人は少なくあるまい。またプロットの面でも、ルソーの叙情劇『ピグマリオン』の影響がしばしば指摘される。

象牙の彫刻に主人公である芸術家の情熱によつて命が与えられ、若い娘となつて結ばれるという筋立てである。しかし、こうした類似は皮

相的なもので、ゴドウインの小説『ケイレブ・ウィリアムズ』の筋立てやテーマからの影響の深さとは比べものにならない。たとえば、好奇心からの分別を欠いた探究はときに破滅的結果を生むといった教訓はその一つである。もっともゴドウインやウルストンクラフト自身がルソーの強い影響を受けていた。

ルソーから彼らが、そしてメアリが受け取った最大のメッセージは「社会が人を悪く扱えば、人は悪くなる」という考えであった。怪物はいう。「私はやさしく善良だった。窮状が私を鬼のようにした」と。単なる被造物を「怪物」に仕立てたのは人間社会なのだった。

その一方で、「怪物」については、ルソーはちがったメッセージも送っている。

もし自然が人間に対して理性の支えとして憐れみの情 (pitié) を与えなかったとしたら、人間は、ほかにどのような美德をそなえていようと、怪物にすぎなかったらう……同情とは苦しんでいる者の身になってみる感情であり、未開人ではおぼろげだが活発で、文明人では発達しているのに弱い感情にほかならない (『人間不平等起源論』)。

つまり、人間を怪物たることから救うのは苦しんでいる者の身になる感情、他人の立場に身を置くことのできる想像力で、「文明」が進むほどそうした感情、能力は落ちてくるというのだが、このことはま

さにメアリが夫や父にたいして抱いてきた気持ちではなかったか？ 思えば彼女の周囲にはあまりに多くの、他人の心への想像力を欠く怪物たちがひしめき合っていた。それを教えてくれたルソーその人も、私生活では身勝手な人だった。『エミール』では理想的な人の育て方を説きながら、五人の子はことごとく捨て子にした。シェリーと同じく三角関係を (あるいは作田啓一のいう「三人関係」) 一つ家に持ち込むのを好んだ。ジュネーヴ滞在中もシェリーはバイロンと『新エロイズ』に夢中になって、メア리를放ったらかしてレマン湖周遊に出かける。そのなかでメアリはゴドウインとウルストンクラフトの娘に期待されてきた文学的野心を次第にめざめさせてゆく。もう「怪物」に甘んじるのはいや、もうひとりの「フランケンシュタイン」にならねばと決意したのではないだろうか。

回り舞台のように

ジュネーヴに帰ろう。

今日のジュネーヴの街に普通の意味での「博物館」としての価値がどれだけあるかは疑問である。

「歴史的価値」といっても古代や中世の遺構はないし、街並みの美に代表される「美的価値」は正直いってそれほどとは思えない。なるほど山紫水明、多くの人を集める魅力をもった町ではあるけれど、それは周囲の自然の力によるところが大きい。ちなみにカルヴァンは、低地地方育ちで一度の山越えで自然を恐怖の的とするようになったル

ターとちがい、自然の偉大と美を認めた。それはジュネーヴ聖書（一五六〇）の天国図とルターの呪われた地球観との比較からもあきらかである。湖を見下ろすこの街に、どこかあの圧制を忘れさせる風の通りのよさを感じるのはそのせいかもしれない。その反面、カルヴィニズムを奉じる都市の常として、華麗や豪奢、洗練は望むべくもない。あれだけの宗教都市でありながら、教会は殺風景で「説教用の箱」であり、世俗建造物も目を愉しませる要素に乏しい。「美」「より」「徳」

の街なのである。大聖堂に置かれたカルヴァン愛用の椅子のいかにも禁欲的なたたずまいがこの街の性格の一面を象徴している。

ルソーはどうか？彼がこの街の性格を作ったとか、風景を変えたとはいえない。しかし、人のジュネーヴを見る目は疑いもなく変わった。ひとつには彼が故郷に抱いた幻想——ギリシャや共和政下のローマの自由と自治の再現という——をつつじて、もうひとつには『新エロイズ』の舞台となり、その著者を生んだ土地へのあこがれをつつじて、ジュネーヴのイメージは「プロテスタントのローマ」のそれとは大きく懸け離れたものとなった。

メアリ・シエリーの場合はどうか？『フランケンシュタイン』はルソーから直接に、あるいは彼女の両親を通じて受け継いだ思想や感性を、まさにこの地でよみがえらせ、現代の寓話として定着させた。夫にもバイロンにも、それに匹敵するほどの記念碑的な意味をもつ作品はない。にもかかわらず、この地にフランケンシュタインとの結びつきで新しいイメージが生まれたとはいえないだろう。それどころか、

デオダッツティ荘には「バイロンとシエリーがここに滞在した」という記念碑板はあるのに、メアリの名も、フランケンシュタインの名もそこには記されていない。かわいそうなメアリは、死後百五十年をへて今もこの啓蒙の都では自立が認められず、「怪物」として無視され、拒絶されつづけているのであろうか。

《蛇足》

参考書については、以下必要最小限のことだけを記しておきたい。

文中「モニター」と略記したのはE・W・モニター『カルヴァン時代のジュネーヴ—宗教改革と都市国家』（中村賢二郎・砂原教男訳、ヨルダン社、一九七八）である。

ツヴァイクのカルヴァン観は今からみれば古くもあり、偏つてもいるだろう。改革教会の立場を踏まえている久米あつみ『カルヴァン』（講談社、一九八〇）でチェックをはかった。

ルソーとジュネーヴのかかわりについては、小林善彦『誇り高き市民—ルソーになったジャン・ジャック』（岩波書店、二〇〇一）がすばらしく、これ以上のものが考えられるかと思っていたが、川合清隆の未完結の連続論文「ルソーとジュネーヴ共和国（上）、（中）」（甲南大学紀要・文学編二二九、二〇〇二、同二三四、二〇〇四）を読んだ、あたらしい数多の知見におどろかされた。なお作田啓一のいう「三人関係」については『個人主義の運命—近代小説と社会

学』(岩波新書)を参照。

一書である。

シエリー夫妻、ゴドウィンについて一冊だけ挙げるとすれば、Richard Holmes: *Shelley: The Pursuit*, 1974 (サマセット・モーム賞) ということになる。その「追跡」の徹底ぶりは同 *Footsteps. Adventures of a Romantic Biographer*, 1985 (ニューヨークタイムズの年間ベスト) にも一端をうかがうことができるのだが、ここでもクリストファー・フレイリング『悪夢の世界・ホラー小説誕生』(原作は一九九六、荒木正純・田口孝夫訳、東洋書林、一九九八) による新しい知見の提示とホームズ説への修正のあることを付け加えておきたい。

最後に『フランケンシュタイン』の読みをめぐるてはおどろくほど多数の試みがくりかえされてきたが、それらを十分咀嚼したうえであざやかな手さばきで整理した待望の本が現れた。廣野由美子『批評理論入門——『フランケンシュタイン』解剖講義』(中公新書) がそれで、食欲をそくタイトルのせいで(著者は『新・小説神髓』としたかったらしい)、刊行後三月近くも私のアンテナにかからず、本稿再校後になって書評紙でその存在を知った。ともすればこじつけに墮しがちな批評理論をやわらかい語り口で説き明かしてくれるだけでなく、それをつづじてこの一筋縄ではいかぬテキストに含まれたメッセージをあますところなく掘り出し、適切に位置づけ、テーマの大きさを浮かび上がらせる力量は並みのものではない。私の知るかぎり海外にもこれだけ包括的な仕事はなく、注目の